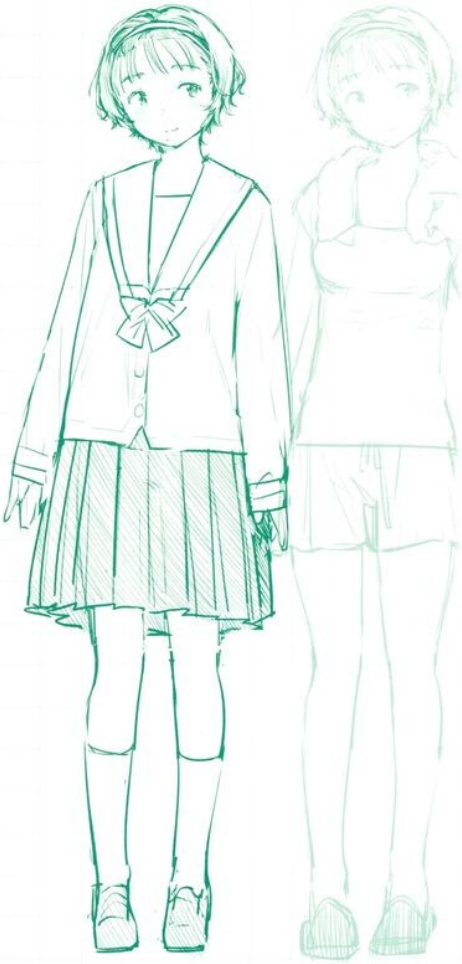
presented by
棟蛙
おうち　かえる

湯気のゆくえ



・エマちゃん
クラスで一番かわいい女の子　見た目ハーフ（北欧とか寒い地域の国と日本）だけど中身は普通に日本人、銭湯好き
親が転勤族で転校してきた

・主人公
家族で古い銭湯を経営していて主人公も放課後は薪窯の管理を手伝っている

転校生のエマちゃんが銭湯にくる　笑顔で話しかけられてドキドキしながら照れ隠しにぶっきらぼう対応+差別っぽい発言
→エマちゃん怒る
→一週間経っても学校で避けられている　ポイントカード渡すついでに謝罪
→「ん…？なにこれ」
「この前失礼なこと言ったから謝りたくて…」
「スタンプ35個でお風呂セットプレゼント…？って　あ、もしかして…私にまた銭湯来てほしいんだ？」
「い、いや…（ドキッ）勘違いすんな！ただの営業だから！新規のお客さん滅多に来ないから貴重なんだよ」
「へえー　ま、声かけられなくても普通に今日行くつもりだったんだけどね（金曜は銭湯の日って決めてるから）
でもありがと！今日からためるね（ニコッ」
ダイジェスト　・春の体力測定で負けた方が銭湯上がりのコーヒー牛乳奢るとか（エマちゃん走るの速そう…
・夏の登校日は学校終わりにそのまま銭湯行って汗流したりとか
・秋は何でしょうか（ぽつぽつと季節の描写いれたりしてだんだん寒くなりはじめて12月
「うう〜寒〜〜」←銭湯にきたエマ
「うわっ主人公こんな日にも半袖とかほんと信じられない」
「薪足すのめちゃくちゃ熱いんだよ　今は体冷ましてんの」
「薪って…ここの湯って薪窯で沸かしてるの？」「そうだけど」「めずらし〜！管理大変でしょすごいね！」
（すごい言われてちょっと嬉しい）「まあ、俺がやるのはつぎ足しくらいだけど……窯覗いてく？」
→ボイラー室へ　このあとも提案してもらった感じの展開で…

「私のハダカ見るの　ほんとにはじめて？」
「ッ！？いや流石に番台座ってるからって…そもそも衝立で見えないし」
「覗こうと思えば覗けるでしょ？」
「それは……」←（ほんとはちょっと覗いたことあるのかなー…？）
「じゃあ…もっと近くでみて」　みたいなやりとりとか、

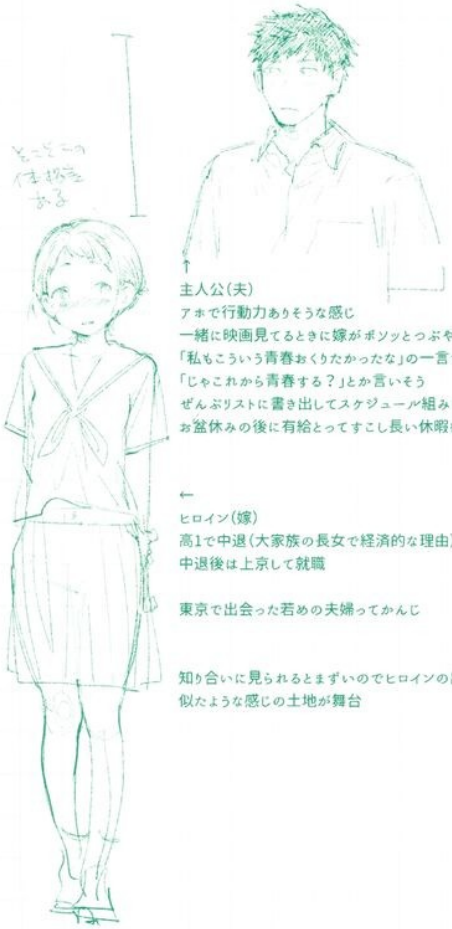
主人公が家業の銭湯を継いでアラサーになった頃エマちゃんが最後のスタンプを押しにくる再会エンド

作家コメント

えっち漫画を描いていながら、美少女を描こうと意識したのはこの作品がはじめてでした。銭湯好きの担当編集さんから銭湯の歴史などがまとめてある参考資料を頂き、入浴料の変化など細部の描写に繋がっています。

夫婦の青春ロールプレイえっち
高校を中退したヒロインが誰も知らない土地で青春を取り戻そうとするお話

夏のいたずら



↑
主人公(夫)
アホで行動力ありそうな感じ
一緒に映画見てるときに嫁がボソッとつぶやいた
「私もこういう青春おくりたかったな」の一言で
「じゃこれから青春する？」とか言いそう
ぜんぶリストに書き出してスケジュール組みそう
お盆休みの後に有給とってすこし長い休暇を作る

←
ヒロイン(嫁)
高1で中退(大家族の長女で経済的な理由)
中退後は上京して就職

東京で出会った若めの夫婦ってかんじ

知り合いに見られるとまずいのでヒロインの出身地と
似たような感じの土地が舞台

制服でチャリ二人乗り、浴衣で花火大会デート、など
キラキラした高校生カップルがやりそうなことを一通りやっていく夏

最終日(花火大会)、花火みながらの会話
「今日でお休み終わりだね」
「また来年もやる？　有給取れれば　あ、でも流石に制服は限界」
「もう十分だよー笑　〇〇くんのおかげで学生の頃にやりたかったことほとんど叶っちゃった」
「そっかー　って　ほとんど？」
「あ…うん　えっとね」
「〇〇くんは　もし私と高校生の頃に出会って　こんな風に青春してたとしたら……
どんな風にえっちしてたと思う？」
「え…ーっと　多分だけど
当時彼女いたら我慢とかできなくて　結構激しくしちゃってたかもなーとは思う」
「じゃあ…夏休み最後の夜に　周りに自分たちしかいないところで　シたいって言われたら
(主人公の手を引いて浴衣の裾の中に手をいれつつ)
「…えっちしちゃう？」
→浴衣でえっち
(神社の裏とか描きたいけどどうだろう…)

体格差がある男女の激しいえっちが描いてみたい、でも痛そうなのとか愛がないのは嫌だ～！ってわがままを広げたお話です。執筆中は山や海を彷徨っていたので、道中見た風景を資料に描きました。

作家コメント

つづきから

主人公(和田くん)
アラサーのサラリーマン
独身

ヒロイン(河原すず)
駄菓子屋の娘
(現在は駄菓子屋から
家族経営のコンビニ)
昔の同級生
サバサバしてる
独身処女

駄菓子屋で毎日顔を
合わせていたことも
あってなんとなく
お互い好きだったし
少しの間たぶん
付き合って(?)た
(小学生同士の
あやふやでピュアな関係)

小学校卒業あたりの
タイミングで主人公が
引っ越してうやむやに
なってた

駄菓子コーナーの台に
ちいさくのこってる
(普段は駄菓子で隠れてる)

仕事で近くに来た主人公が昔よく行ってた駄菓子屋(現在はコンビニ)に行き
小学生のころ両想いだった(付き合ってた?)女の子と再会する

コンビニでのやりとり
「ビィスライト2つください」
「はーい……、、!」
「———帰ってきてたんだ」
「久しぶり…だな」
「まだ店あるって聞いたから　近くに来たついでに」
「仕事?」
「うん」
「へえー…」
「……店、コンビニになってて驚いた」
「あー、和田君が引っ越した後だっけ　改装したの
　一応駄菓子は残そうって話になって」
「そか　じゃあ河原はずっと地元な感じ?
　……あ、ごめん　こんなとこで話し込んじゃって」
「いいよ　この時間全然お客来ないし」
「てかもう閉店時間だから外で待ってて〜」

→タバコ吸って待ってる主人公　ヒロインがチューハイもって出てくる
「車じゃないよね?」
「うん」
空き缶とタバコの吸い殻でほろよい&暫く会話してる感じ
「あーそんなんあったな」
「小学生のくせにませてたよねー　で、そのままうやむやになったんだ確か」
「まあ…当時の俺らには別れ話するなんて発想なかったな」
「てことはまだ付き合ってるんじゃね?!笑」
「あ　てかそろそろタクシー呼ばないと終電が…」
「ひゃっ　タクシーですか〜　都会の人はちがうなあ」
「そんなことに金かけるなら　ウチの店　泊まってけば?」
「え?」
「駄菓子屋だった頃はここに住んでたから　泊まる設備はあるんだよね」
「……どう?」(えっちな顔) →えっちの流れ

店の奥にある畳で居間っぽい空間
(今は在庫の段ボールとか置いてそう)でキスしてる
「キスしちゃだめだった?」
「えっ　と…」
「だって私たち　まだ付き合ってるんだよね?笑」
「じゃ、そういうことに　しとく」
　→そのままキスしつつヒロインのズボンに手伸ばす感じ
「…別に待ってたわけじゃないんだけど　断じてね
あれから　ピンとくる人　なーんかいなかったんだよね」
「それってどういう…」
「察しろよ。アラサーに言わせる気か!?」
「やさしく　する」
　→手マン?
　　「……慣れてるじゃん」
　　「いや…俺だってそんなに経験多くないけど」とか
　　基本主人公が主導のえっちになる(?)ので

作家コメント

個人的にとても好みのビジュアルになったヒロインです。初期プロットでは昔ながらの駄菓子屋だったのですが、改装されたコンビニに前の店の名残が残っている方が趣深いのでは?という担当編集さんの案で　エモさとリアリティが出ました。

©樣莊／ワニマガジン社 2022 NOT FOR SALE